

ケム川に架かる橋にて

堀地 紀行
HORICHI Noriyuki

国士舘大学工学部教授



■ケンブリッジ

ロンドンからこちらに移動して早2カ月、8月も末を迎えたケンブリッジは、東京の10月末の気温に近く、朝晩は12度ぐらいで、セーターを着てもよさそうな気候です。北部ヨーロッパ、イギリスは梅雨がないので、日照時間が直接的に効いて、昼間の長い時期が一番暑くなり、夏至を挟んだ6月末から7月中旬のワールドカップやウィンブルドンの時期に最高気温に達します。さてケンブリッジはロンドンのキングスクロス駅から鉄道で1時間弱、北に約80kmのところにある位置する国際的な学術都市で、人口はおよそ11万人を数えます。名前の由来は、ケム川に架かる橋の町だそうで、そのものといった感じです。大学関係者は約2万人で、内訳は、1万1千人の学部生と、約5000人の大学院生および、残りは教職員、研究者です。ケンブリッジ大学の詳細は、百科事典の記述に委ねることとしますが、ひとつだけ驚くべき数字をご紹介しますと、ノーベル賞受賞者は大学として81名、卒業生に限っても70余名を輩出しているとのこと。大学の特徴を簡単にご案内すると、神学、医学、文学、哲学、法学、芸術、科学、工学、などの学部や諸研究施設

と、その他にキングズ、トリニティー、クイーンズ、セント・ジョンズなどのカレッジやホールと称する31の学寮があり、ちなみにニュートンはトリニティー・カレッジの出身。学生にすれば、学部は法学部で、学寮がキングズ・カレッジという形になります。専門教育は学部で、人格教育と教養教育はカレッジで、という総合教育を大学として行っていることになり、こうした全寮制の大学は、イギリスではケンブリッジのほかにオックスフォード大学が行っていることです。イギリスの伝統的な指導層教育のひとつの形と思われます。また、女子学生も見受けられます。

ちなみにOxfordのfordは川の浅瀬を意味し、牛が渡れる場所が、オックスフォードだそうで、やはり川のほとりに位置しています。

ケンブリッジではカレッジ間の競争意識も強く、ボート、ラグビーなどの対抗競技や、学部の成績も競われ、そうした競い合いのなかから、カレッジの仲間としての一体感も醸成され、社会に出てからの繋がりも堅いようです。このカレッジには教員もちろん配置され、大学院生のほか、ビジティングの研究者もカレッジに所属します。私の場合はビジティングの研究者ですので、研究は工学部の地盤工学系研究室に、寝起きは学寮のチャーチル・カレッジに籍を置かせて頂いています。寝起きと限定したのは、もちろん廉価で食事も提供されますが、夕食などは6時半からおおよそ40分間で、またお酒を楽しむこともできません。ただし、カレッジ内にバーはあります。ミーティングのときはドラの音を合図に食事がはじまり、粛粛と食べて、終わります。そのため、私は数回で、カレッジの食事は諦めました。学部学生は、カレッジでの食事も教育と心得て摂るようですし、昼間のカレッジでは、チューターと呼ばれる学部併任の教員が個別指導や教養的な授業を行います。滞在するチャーチル・カレッジは、その名の通り第二次世界大戦時の首相ウインス



キャンパス内を流れるケム川

トン・チャーチルにちなんだカレッジで、記念館も併設されています。ちょっと余談になりますがチャーチルはイギリスでは保険会社の社名にも使われ、また、置物や人形のキャラクターとして今でも大変人気があるといえます。このチャーチルはケンブリッジの卒業生かとばかり思っていました、武門の誉れ高き貴族の出身だそうで、武人を志したチャーチルは王立陸軍士官学校の卒業だそうです。

チャーチルは後年、第二次世界大戦などの著作で、ノーベル文学賞を受賞しています。文武に亘り才能豊かな方だったことが偲べれます。

カレッジは敷地面積が、ざっと500m×1000mといった規模で、約400名の学生が生活をしています。今は、10月から始まる新学期までは夏休み期間であり、学生はまばらで、大学院生と研究者が滞在している程度です。比較的新しいカレッジのため、低層階のロッジタイプの建物が点在し、バックは、クリケット、ラグビーの各グラウンドとテニスコートが続き、一面の芝の絨毯で覆われています。夏のこの時期は、紫のラベンダーと、ブルーの空と白い雲、緑の樹木や芝と、とても鮮やかな色彩にかこまれます。日本ではさしずめ、高原リゾートのホテルといったところでしょうか。

最近うかがった話ですが、日本からMBA取得のため留学された学生で、授業料は年間2万5千ポンド550万円だそうです。生活費を加えると年間1000万円ほどになるかもしれません。寸暇を惜しんで勉強することでしょう。

ケンブリッジの工学部には、日本の曾我先生が活躍されていて、教授に次ぐReader（リーダー；助教授）という職責で、地盤工学を担当されています。専門分野に限らず、日本からの研究者や留学生の多くが曾我先生にお世話になっています。最近の先生の研究分野では、光ファイバーを用いた土木計測技術について先進的に取り組まれている、私もそうした研究に興味を持っている関係で、曾我先生にお世話になっています。地盤工学の研究室には、10名ほどのドクターコースの学生や研究者が在籍していて、日本からは京都大学の乾先生、国土交通省の森研究官が在籍しています。ほかには、香港、タイ、マレーシア、アラブ系、東欧の学生などで、イギリスの学生は1、2名ほどといったところです。イギリスや西欧諸国では、建設事業は活況とのことですが、研究分野まで進む学生はそれほど多くないようです。

ロンドンシティー大学でも感じたことですが、ここ

ケンブリッジもその傾向にあると思ったことは、工学系では、東欧、アラブ、中国、インド、アフリカ、日本、韓国などの、非白人種の比率が高く、白人種は教員とスタッフと少数の学生という構成です。この背景には、ヨーロッパでは社会基盤や自動車産業は別として、ただしイギリスはロールスやミニクーパー、ローバーなども他国資本に移行、航空機のエアバス事業は熱心ですが、電子家電やパソコンなどのもの造りからの乖離がうかがわれます。もっとも法文系は、アングロ、サクソンの白人種が主体とのことですが。

余談、ここで、日常の消費生活を簡単にご紹介したいと思います。日本と比較しやすいものとして、マクドナルドのフィレオフィッシュ単品、2ポンド450円、日本では200円前後。ペットボトル水、0.7ポンド、160円。日本120円。

庶民的チャイニーズの焼きそば6ポンド1300円、日本700円。

立ち食いそばや、牛丼的な350円ほどの外食はなし。

それに相当するのが、マクドナルドのセットでバーガー、ポテト、コーラで4ポンド900円。日本では500円程度。

ロンドン地下鉄、1区間3ポンド650円、日本160円。

2ピースのサンドイッチ2.5ポンド550円。日本250円。

タバコ5ポンド1100円。日本300円。

消費税、イギリス17.5%、日本5パーセント。

昼食にはパンを公園で食べている人も多く見かけるのは、物価もその理由のひとつかもしれません。大学の食堂で、3ポンドぐらいいで、パンとスープなどを食べて済ませています。日本なら、300円程度のものですが、こちらでは700円にもなります。

庶民的イタリアン、チャイニーズ、インドなどのレ



きれいな芝生のあるキングスカレッジの中庭
もちろん芝生には立ち入り禁止

ストラン（食堂）で、サラダ、おつまみ、主菜、ビールなどで、25ポンド5500円かかります。

外食、とりわけサービスが伴うものは高く、通常は家で、スーパーから買ってきて食べるのが普通のようなのです。私の場合、夕食はほとんど外食ですから、何とか20ポンドで済ませるように苦労しています。日本であれば結構なご馳走が出てくると思うのですが。

また、ロンドンのB&B（ベッド&ブレイクファースト）つまり低廉ホテルで、45ポンド10000円します。東京では5000円程度のビジネスホテルです。そして、イギリスでは、清涼飲料水はコカコーラ系、チョコレートはネスレなどで、自国のブランドはほとんど見当たりませんし、種類も当然貧弱です。

利益の薄い商品のもの造りはやめてしまい、観光、外食などのサービス産業と、金融業の国とはこのよう

になって行くのでしょうか、いくつかのヨーロッパ大陸の国々も大同小異で、日本もこのようになっては困りますし、少々、空恐ろしい気がします。



キャンパス内はきれいな並木道が多い

編集委員リレー執筆コーナー

伊藤 和彦

ITOU

Kazuhiko

日本ゼニスパイプ(株)
代表取締役社長



20年ほど前にイップス（yips）にかかったことがあります。yipsの語源は“子犬が吠える”という意味だそうです。本誌の読者層であればほとんどの方はご存知と思いますが、具体的には“神経に影響する心理的症状。集中すべき局面においてプレッシャーのため極度に緊張すること。それを原因としてふるえや硬直を起すこと”を言います。野球をはじめとして色々なスポーツに症例はあるそうですが、私の場合は唯一の趣味であるゴルフでしたから悲惨なものでした。

ゴルフで有名なのはパットでのイップスですが、私はドライバーとアイアンに（いわゆるフルショット）症状がでました。当時の私のスコアはハーフ42くらいで、40の壁を越えようと必死になって練習していたころです。たまたま関西に出張の折、池に打ち込む水上練習場で水に浮く軽いボールを打ってから、変になってしまったのです。

素振りは普通にできるのですが、ボールを見ると全身に強烈な力が入り、にっちもさっちも行かなくなるのです。バックスイングしたクラブがおろせないという感じは多分イップスになった人しかわからないでしょう。とにかくどのクラブで打っても100ヤードしか飛びません。ハーフ60を叩くこともありました。惨めな思いで1年間クラブを置きました。そして半年くらい徐々に練習場で慣らして再びコースに出ました。スコアは2ラウンドとも39、40でした。イップスを克服するにはやめるしかないというのは本当みたいです。

本誌とは関係ないことを書いてしまいましたが、本誌で扱う非開削技術は日進月歩で新しいテーマを追いかけているように思います。超小口径から超大口径に至る管路の建設、調査、更生そして改築に至る、あらゆる技術に前向きに取り組む姿勢が、本誌を編集する立場から見えてまいります。今後とも編集委員の一人として日陰に咲く花から、大輪の花まで非開削に関する取り組みを取り上げて行きたいと思っています。非開削に従事する皆様、新しいことにチャレンジする気持ちを持ち続け、イップスにならずにがんばってください。

ゴルフ場で足首を複雑骨折した逸話もありますが、これはまた機会を改めて・・・。